

## 「あの日に二児を失って」(上田あや子)

昭和二十年八月六日、原爆の悲劇。二六時中忘れることのできないこの世の生き地獄。原爆二十年。犠牲になった二人の子の歳を数えてまた新たな涙に暮れる。私は四人の子宝を喜びとし、誇りにもしていた。長男は暁部隊に入隊し、次男は学生であったが、これも飛行隊にはいたいと、東京から希望をいつてきた。二人とも戦死すること覚悟せねばならぬ。寂しかった。

長女茂子は賀茂高女の三年生であった。学校は軍隊の被服廠に工場化した。四年生が挺身隊として呉や広の工場に出向ったあとは、三年生が代ってミシン仕事に当った。日曜も祭日もない。帰ると「お母ちゃん足が痛いよ」と訴える。暑さと疲れで痩せていた。それでも毎朝女子挺身隊の鉢巻姿で元気に自転車のペダルを踏んで出かけた。「今日はB29が学校の上を飛ぶので仕事にならなかった」と報告する。いろいろなニュースも聞かせてくれた。三男信彦は松本工業の二年生で、動賛されて国鉄電気部で働いた。

八月五日、大手町八丁目の親戚の伯母の灰葬であった。その日は日曜で特に休みだったので、長女は三男と共に広島に来てくれた。前日の葬儀には私たち夫妻が列席したが主人だけ夕方原に帰った。子供等は主人の代わりに来たのだ。灰葬もすみ私と長女は夜汽車で帰村する積りで広島駅に出た。子供二人が切符を買う行列に加わった。切符の数に制限があるのでとうとう買うことができなかった。それでは明朝にしようと私は馬木の生家に、子供等は大手町にと分れて泊まった。

翌朝子供等は切符を求めに駅に来た。今度は切符を買うことができた。駅で二人は私をまっていた。長女は忘れ物に気付き大手町へとりに行った。三男も出た。長女は駅に引き返す途中原爆にやられて行方不明。三男はあとでわかったのだが、鷹野橋で爆風に倒れた。私は広島駅で落ち合うことにしていたが、パスに乗りおくれ途中でピカにあった。きっと広島駅に爆弾を落したのだと無我夢中で大洲橋まで馳せつけたが、そこで消防団に押し止められた。市内へ一歩も踏み入れられない。子供等はどうしているだろう。ぞろぞろ市内から引きあげるのは、顔や手足など露目した部分を大火傷の人ばかり。目もあてられない。二人の子供は汽車に乗ったろうか、こちらに歩いて来ないか、夕方まで待ったが帰って来るのは知らない人ばかり。ふと考えた。道がちがって海田駅から原に帰ったかも知れぬ。海田駅まで歩いた。海田では見つからない。急いで原に帰った。原では私等三人が帰るのを待っているのだと両親がいう。これはどうしたことか、泣いても泣ききれず、前にも進まねず、後にも去られず、六日の夜はまんじりともしなかった。火傷には渋柿が良いということなので、夜中青柿を沢山もぎとり、それに二人の着替一切、果物・菓子・水筒と万一のことがあったらよくなるまで看護してやろうと、一週間分の食料を用意して主人と夜の明けるのを待ちかねて八本松に急ぎ、四時過ぎの汽車に乗った。

海田市の寺院・学校・収容所を訪ね、茂子よ信彦よと、主人と代る代る呼び歩いた。船越・向洋・府中とつぎつぎに収容所を尋ね廻った。市内は火の中でとても歩けない。東練兵場に来た。倒れて虫の息の人、髪を切った兵隊さんたち多勢倒れている。

ふと婦人従軍歌を思い出した。一線で働いて軍人はみなこのとおりであろう。長男も二男もこのようになるのだろうと声を立てて泣いた。ここに倒れている皆さんの親御も同じ

思いで待ってられることだろうと、念珠を出して拝んだ。あるお寺の収容所で「おじさん、おばさん」と呼んでくれる人がある。誰れかさっぱり判らない。「渡辺です、藤保です」という。びっくりして近寄って見ても渡辺さんのようにない。顔も手足も腫れ上がり、まる裸の全く変りはてた姿である。ただ聞きなれた声だけでたしかめた。「御両親に生存されていることを知らせてあげるから頑張りなさいよ」と言い残して分れた。「水を飲ませて」と訴える声、声。はじめは少しずつ飲ませていたが、「水を飲ませると急に死ぬ」という話も聞いているし、我が子に飲ませるのが無くなってはと、水筒を見せないことにした。あの時ばかりは心が鬼になったと思った。

同じ収容所で、全裸で、腫れ上がって目も見えず、水腫れがずるずる潰れ、肌の皮が破れて襤褸が下がったような姿で、ただ「木をくれ、痛いよ、痛いよ」とうめく人。片息の人。狭いバラックへ何百人も収容されて手の施しようもない。日陰にかつぎ込まれたのは幸運な方で、焼けつくようなカンカン照りの下でうめいている人が多い。どうしようもない。我が子もどんなにか私を待っているだろう。早く逢いたいとあせるばかり。七日も暗くなって歩けない。欠賀町の親戚で一夜を明かした。夜が明けるとまた二人は麦わら帽に相変らずの姿で出かけた。

八日には市内の火もあらかた消えたので、第一番に広島駅付近を探し廻り、つづいて鷹野橋辺に行った。広い広島市も一面の焼野原。残るは鉄筋コンクリートの残骸と水槽だけ。主人の後について泣き泣き見当もなく歩き廻った。地面はまだ火気があるところへ、真夏の暑さに、汗と涙で手拭は幾度しぼったことか。何千何百の死体を見ながら、時には手をかけ動かして見たり、モンペの柄をしらべたりした。県庁前の水槽や鷹野橋までの水槽の中で、五、六人ずつ立ったままの女学生の焼死体。可愛想にさぞ「お母ちゃん、お母ちゃん」と呼びつづけたことであろう。合掌せずにはおられない。

八日は出汐町の親戚に宿泊。九日は宇品方面、似島、鯛尾島を予定し、先ず宇品収容所へ。そこでしらべると、上田信彦鯛尾島暁部隊と出ていたので二人は大喜び、さっそく鯛尾島に渡った。係りの軍曹が「昨夜苦しんでよく眠っていないので静かに休ませてやってくれ、ひどい火傷だから」といった。すぐ面会させてくれた。「信彦ちゃん……お父ちゃんもお母ちゃんも来たよ」信彦は涙を浮かべ「お母ちゃん、僕はね、鷹野橋で爆風にやられ、一間ほどはね上げられ俯伏せに落ちた。それから兵隊さんの車で宇品に運ばれた。お姉ちゃんは忘れ物をとりに西本（大手町の親戚）へ後戻りしたので、きっと原に帰っておる」と話してくれた。「お母ちゃん、お母ちゃん」と呼ぶ。頭元で、持ち歩いた果物や水筒の水をあげようかという、「ここにまだみかんがある。毎日みかんをもらうからいらぬ」と満足していた。「お母ちゃん、井戸の冷たい水を茶碗へ一杯飲ませて、それから家の前の倉庫のサイダーを飲ませて頂戴」と頼む。夫妻で相談した。たしかなようだから大丈夫だろう。主人がサイダーをとりに原に帰り、長女が帰っておるか見てくる。私は残って看護するということにした。どこが痛いかと尋ねると、それには答えず、ただ、冷たい水とサイダーが飲みたいというばかり。そこへ兵隊さんが来て「静かに、静かに」という。足もとにさがり足をさすっているうちに鼻汁を出し、眠っているのに呼吸は大きくなり容態が急変した。主人はまだよう帰らずに外にいたので呼び込んだ。もう話もできない。意識は不明になった。私は手を握り、脈を見ていた。信彦ちゃん、信彦ちゃんと呼んでも返答もない。吐く息も次第に細りついにとまった。両親の顔を見て家に帰った気持になって永い

眠りについたのであろう。冷たい水も無く、サイダーも飲ませなかったことが一生忘れられない憾みである。今でもサイダーを見ると思い出す。胸が一杯になる。思い詰めると胸が板をはせたようになる。三日間持ち歩いた着替えも間に合わず、柿の渋も用をなさず、葡萄も菓子も口にせず哀れな全裸で永い眠りについた。思い出しては「ああ、可愛いや可愛いや、主人や私への善知識であった」と感謝せずにはいられない。死体は兵隊さんがさっそくタンカに乗せた。お経をあげるひまもない。髪の毛と手の皮と爪だけ持ち帰って葬儀をした。

今度は長女が気になる。似の島に渡った。収容所を調べたが名簿には無い。あれでもと大きな声で呼び歩いたが結局駄目であった。しかしもう帰る船がない。仕方なく島で一泊した。十日字品に着き、江波・吉島等の収容所・防空壕・飛行場と尋ね歩いた。死体はもう悪臭を放っている。それでも調べられるだけ調べた。各所で死体を火葬していた。江波では飯盒炊さんで野宿した。十一日は己斐収容所・学校と聞いては転々と歩いた。焼け残った田舎で歩いてなかなか行かれないのは横川や草津であった。己斐では蚊にさされながら馬車の上で一夜を明かした。死体も焼かれてほとんど片付き、市役所で名簿が整ったとのことで調べてもらったが、上田茂子の名は無かった。やむを得ず一応家に帰って茂子が帰っていないければまた尋ねに出ることにした。己斐から広島駅まで歩いたが、何の目標もない。広い広い焼野原で、一木の杖が欲しくてもそれさえない。二人は心身ともにほんとは成れ果てた。「茂子は原に帰っておる」といった信彦の言葉を信じ、信彦の死体を抱きしめて我が家に帰った。家にはいるや「伯母さん茂子は」と尋ねた。伯母は「だれも帰っていないよ」という。この一言で張り詰めた精も魂も尽き果て、気が遠くなり土間に泣き伏したままであった。仏壇の前にいつ行ったか覚えがない。(中略)

本川橋ぞいの川縁は死体で埋めつくされ、川をのぞけば砂の中に手足を突っ込み流れもせず沈んでいる人、人、鷹野橋の川筋もやはり同じである。それから八丁目までの道路らしいところを、原から持参したスコップと鍬で、胸につけていたネームともんぺの柄をたよりにさがすことにした。翌日は近所の方々が二度目を探しに来て下さった。大変御世話をかけた。こんなにして二週間尋ね歩いたが何の手掛りもない。そこで思いを変えて山口県境大野村までの救護所をさがすことにした。救護所や警察を聞き尋ね、何度も無駄足をふみながら歩き廻ったが、どこにも名簿に乗っていない。宮内・大野、宮島にも無い。こんどは芸備線にはいることにした。戸坂・狩留家・深川にも無い。いよいよ三次にもいないことがわかり、あきらめがついた。同時に精魂が尽きたのか、可部警察で倒れた。親切なお巡りさんが近所のマッサージ師のところに連れ込み、治療させてくれた。やっと杖にすがって歩けるようになり、電車で横川に出た。広島駅まで杖を力に歩き、やっと汽車に乗った。今まで酔ったこともないのに中野駅の手前で眩暈がして車中に倒れた。中野駅に下ろして手当をしてもらった。中野駅から八本松駅に連絡して原から迎えに来るように計らってもらった。家に帰って両親に深く詫びた。頭が上がるようになって、広島市内を探しだしてから約半月を経ていた。家の者が「お前が倒れてはいけない、もうあきらめよ」というがどうにもならない。なぜあの時一緒に死ななかつたかと愚痴も出る。

八月六日から月一杯二十六日間命がけで探し見当たらないのだから、即死にちがいないと気付き、二人の写真を仏壇に納め朝夕に御給仕と礼拝を唯一の慰めとしている。十月四日ふと高熱に冒され、意識不明が十二月四日までつづいた。